教科又は教職に関する科目，日本史Ⅲ・Ⅳ

愛媛県の歴史を読む（日本史Ⅲ）・中世の寺社勢力と地域社会（日本史Ⅳ）

社会科・川岡勉

今年度は，前期に開講した日本史Ⅲと後期に開講した日本史Ⅳを，継続性を持たせる形の内容で取り組んだ。対象学生はともに学校教育教員養成課程の３回生であり，日本史Ⅳの受講生の多くは日本史Ⅲを受講した学生であった。以上の点に鑑み，ここでは２つの授業をあわせて評価を行なっていくことにしたい。

前期の日本史Ⅲでは，〈授業の目的〉を，社会科における基本的な教養として，地域に視点をすえながら日本史の流れと日本社会の特質を理解するというところに設定し，〈到達目標〉を，(1)瀬戸内海・伊予を舞台に展開した地域の歴史に関する基礎的な知識を獲得する，(2)地域史を他の地域や国家・世界との関わりにおいて捉える視点を獲得する，(3)地域の歴史を踏まえて，これからの地域のあり方や改革の方向について，自分の考えをまとめ論述する力を身につける，とした。授業のキーワードは，地域史，瀬戸内海，伊予とし，以下の授業内容をシラバスで示した。

はじめに
1　地域社会から国家形成へ
2　伊予国の成立
3　律令制下の伊予
4　中世社会の成立と西国武士団
5　寺社勢力と民衆生活
6　戦乱の深まりと伊予
7　地域経済の発達と文化
8　伊予の近世化
9　近世伊予の町と村
10　産業の発達と文化交流
11　幕末から近代への歩み
12　近代の愛媛県
13　現代の愛媛県
おわりに

授業の進め方として，内田九州男・寺内浩・川岡勉・矢野達雄『愛媛県の歴史』(山川出版社，2003 年）をテキストとして用い，受講生全員があらかじめテキストを読んできて，それに基づいた発表を順番に行ない，発表をうけて討論を進める形で授業を展開することとした。また，テキストの理解をより深めるために，適宜，必要な資料を掲載したプリント類を配布した。

授業は概ねシラバス通りに行なわれたが，テキストは９章から成り立っていて，１回の授業で１章分を扱うことが多かったため，最後の方で時間の余裕が生まれた。そこで，この時間を利用して，大学の周辺地域に残る文化財の現地見学を行なうことにした。護国神社前に集合して，護国神社，一草庵，千秋寺，足立重信の墓，ロシア人墓地，おこり地蔵など，御幸地区の歴史遺産を見てまわった。この時も，あらかじめ担当を決めて調べさせておき，各歴史遺産の説明を学生たちに行なわせた。急遽とりいれた現地見学であったにもかかわらず，学生たちはインターネットなどを利用して下調べを行ない，熱心に見学を行なっていた。見学ルートには，へんろ道の道標やアジア太平洋戦争の慰霊碑もあり，一草庵には種田山頭火を慕って遠くから訪れた人が思いを書き記したノートも置かれていた。学生たちは，歴史の息吹を伝える生の素材に触れ，自分たちの生活する身近にも過去の人々の様々な営みがあったことを実感することができたようである。教室で地域の歴史を学ぶのとは違った経験であったと思われる。

最後にレポートを提出させ，授業中の発表と討論の状況を加味して総合的に判断して成績評価を行なった。受講生は 16 人であった。

後期の日本史Ⅳは，社会科教員をめざす者が身につけておくことが望まれる知識や方法を学習する，という〈授業の目的〉を掲げた上で，具体的には前期の地域史の内容をさらに深めるために「中世の寺社勢力と地域社会」というテーマで授業を行なった。前期で取り扱った伊予の歴史のうち，中世にしぼった内容を特に寺社勢力との関わりで論じたものである。各回で取り上げたトピックは次の通りである。

1　中世社会と寺社勢力
2　日本における仏教の浸透
3　作善の流行と寺社勢力
4　鎮護国家の仏教
5　石手寺の信仰と衛門三郎伝説
6　地方武士と氏寺

7　村堂・町堂と別所・草庵
8　一遍の出家と仏道修行
9　一遍の旅と思想
10　四国遍路の成立
11　年中行事と大般若経
12　河野氏の分国支配と寺社統制
13　戦国時代の高野参詣と弘法大師信仰
14　おわりに

この授業では，最初に前期（日本史Ⅲ）とのつながりに留意して，地域に残る遺跡や文化財に目を向けることの重要性を指摘し，地域住民の歩んだ素朴だが豊かで個性的な歴史を復権させることは歴史学のあり方そのものを組み直すことにつながること，地域に生きる人々が自分たちの生活実感に即した歴史を生み育てていくことがこれからの歴史学や歴史教育に求められていることを強調した。その上で，愛媛県にある有形・無形の文化財の中に宗教に関わるものが多くを占めていることを述べ，過去の人々の思いや願い,祈りなどをすくい上げるためには,人々の信仰を支えたものを論理的に，かつ想像力を豊かにしながら読み解いていく必要があることを指摘した。

具体的には，松山の石手寺，今治の国分寺・無量寺，東予の観念寺などに伝えられている中世史料を取り上げ，また伊予の生んだ一遍の歩みや四国遍路の歴史をたどりながら講義を行なった。また，伊予の人々による高野山参詣についても言及した。これらの講義内容は過去に行なった国分寺・観念寺の調査，本年度に行なった石手寺・無量寺・高野山金剛三昧院の調査がもとになっている。

最終回に授業改善に向けたアンケートをとったところ，授業に非常に意欲的に取り組んだと答えた学生が６割，意欲的が１割，普通が３割であった。学生の評価が最も高かったのは，担当教員の熱意･工夫が感じられたという項目で，非常によいという回答が 85％にのぼった。授業テーマの明確さ，話し方の明瞭さ，重要箇所の強調度，自分の考えが培われたり得るところがあったという項目も，非常によいと答えた学生が６割であった。逆に最も評価が低かったのは黒板の書き方や文字の見やすさという項目で，普通が３割，あまりよくないが 15％であった。板書については改善が求められていよう。

この授業に対する興味・関心や疑問点について具体的に問うたところ，古文書や写真などの資料が豊富で分かりやすかった，身近な地域を対象としていたことで興味が持てた，地域史を利用した教育の可能性を再認識できたという回答が目についた。仏教や寺社などに日ごろ関心を持つ学生は少なく,関連する知識にも乏しい。しかし，それだけに，毎回の講義が新たな発見の連続であったという回答が寄せられた。こうしたテーマでも，工夫次第では，学生の関心を引き出すことができることが分かる。

個々のトピックの中で特に印象深かったのは四国遍路の話だったらしく，その歴史に謎が多い点に学生たちは驚いていた。既知の事象を学習するというスタイルではなく，未知の問題を残されている資料を手がかりに探究していくというスタンスをとって授業展開を行なったことが学生の興味を喚起したようである。そのためには，調査の仕方や資料操作のやり方を説明する必要があり，本講義では，地域に残された断片的な歴史の痕跡をつなぎあわせて歴史像を復元することの面白さを学生に伝えるように努めた。受講生が７人と小人数であったことも，資料を提示しながら授業を進めていく上で好都合であった。

地域史を組み立てていくにあたって，文字史料に乏しいことが難点として挙げられる。しかし，その代わりに遺跡や文化財のほか，地名・伝承・年中行事・祭礼など，様々な形で地域史を考える素材はころがっている。これらは地域の環境と結びついた人間活動の痕跡であり，これらに光を当てることで歴史が実感をもったものとして感じられるはずである。学生の中には講義を通じて地域の歴史を深く知りたいと考えるようになり，資料を読む訓練を行なって卒業研究につなげていきたいと書いた学生もいた。地域の素材を手がかりに歴史を復元することの面白さを伝えるという講義のねらいが一定の成果を挙げたと考えてよいであろう。

為政者の歴史を受容するだけでは，歴史教育はなかなか学習者の心に響くものになりにくい。歴史は自分たちには縁遠くよそよそしいもの，関係ないものという見方を克服し，１人１人が歴史を切り開く者としての主体性や能動性を身につけていく上で，地域史の学習は大きな可能性を持っている。地域に残る遺跡や文化財を重視する授業を今後も積み重ねていきたいと考えている。